

六勝寺の配置再考

— 京都市美術館の調査成果から —

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

はじめに 現在、京都市動物園、ロームシアター京都、京都市勧業館などの文化施設が建ち並ぶ岡崎地域は、平安時代後期に上皇・天皇や皇族により御所や寺院が次々と建てられ、院政の舞台として栄えました。その中でも、院政を開始する白河天皇が造営した法勝寺を筆頭に、寺名に「勝」の字をもつ6つの寺院は、「六勝寺」と並び称されました。

六勝寺の配置 六勝寺とは、建立された年代の順に、法勝寺(1077年、白河天皇)、尊勝寺(1102年、堀河天皇)、最勝寺(1118年、鳥羽天皇)、円勝寺(1126年、待賢門院)、成勝寺(1139年、崇徳天皇)、延勝寺(1149年、近衛天皇)の6つの寺院を指します。いずれも室町時代頃までに廃絶し、現在は残っていませんが、それらの配置については、寺院の記録や貴族の日記といった文献史料や、地名・字名、発掘調査成果を基に研究が進められてきました。

文献史料による推定地と発掘調査成果が合致し、その位置が確定しているのは法勝寺、尊勝寺、最勝寺です。現在の京都市動物園からその北側一帯にかけて法勝寺、ロームシアター京都付近から北西側にかけて尊勝寺、岡崎公園グラウンド西側の辺りに最勝寺が位置します。円勝寺の位置については、



写真1 京都市美術館の調査で出土した石で護岸された溝(南西から)

『円勝寺供養呪願文』のなかに、法勝寺・最勝寺と隣接するとの記載があることから、現在の岡崎グラウンドの辺りと推定されていました。しかし、1991年から92年に岡崎グラウンドで実施された発掘調査では、寺院に関連する遺構が出土しなかったことから、もうひとつの候補地であった京都市美術館(現京都市京セラ美術館)が最有力

候補地となっていました。

京都市美術館の発掘調査 その京都市美術館の再整備事業に伴い、2014年度から2017年度にかけて、発掘調査を行なうことになりました。史料では、円勝寺には、金堂のほか、東塔・中塔・西塔の3つの塔、五大堂、九間仏堂(薬師堂)、六時堂、二階門、築地、西面門などがあったとされ、そうした建物

跡が見つかることが期待されました。調査は、美術館の敷地全域や建物内部の床下も対象とした大規模なものでしたが、結論から言うと、寺院の伽藍と考えられる遺構は見つかりませんでした。見つかったのは、多数の井戸や小規模な建物群、瓦溜め、溝などで、それらの遺構からは、周辺寺院で使われた多種多様な瓦類、多量の土器・木器、砥石や石鍋、^{ふいご}轆羽口、鉄滓、金属製品、赤色顔料などの遺物が出土しました（写真2）。生活感のある遺構や生産に関わる遺物が多く、排水と区画の機能をもつと考えられる石で護岸された大規模な溝は、11世紀後半から14世紀頃まで修復しながら使われていたこともわかりました（写真1）。11世紀後半は法勝寺の造営が始まった頃で、それを契機として、周辺に御所や寺院がつくられていきます。また、鎌倉時代には六勝寺の大半や御所が焼ける火災、地震にもたびたび見舞われたことが史料からわかっています。寺院造営や修復には、人材と工房、資材の集積地



写真2 調査で出土した轆羽口

などが必要不可欠であり、出土した遺構・遺物の性格や時期からみて、京都市美術館の敷地は、そうした寺院群の維持管理のための工房群だったのではないかと推測されます。

六勝寺の配置の謎 では、円勝寺はいったいどこにあったのでしょうか。「白河之傍」と記された史料の存在から、白川に近い京都市美術館のさらに南側にあったのではという説や、14世紀の史料をもとに鴨川の東にあったという説などがありますが、いずれも決めに欠けます。また、六勝寺のほ

かの二つの寺院、成勝寺と延勝寺についても、推定地での発掘調査では、寺院に関連する明確な遺構は見つかっていません。そもそも、成勝寺と延勝寺の位置については、史料上、円勝寺の西隣に成勝寺、さらにその西に延勝寺があったと解釈できることが一つの根拠となっており、今回、円勝寺の位置が不確定となったことで、両寺院についてもその配置を見直す必要が出てきました。謎は深まるばかりですが、明らかにするためには、発掘調査の進展を待つしかなさそうです。（柏田有香）

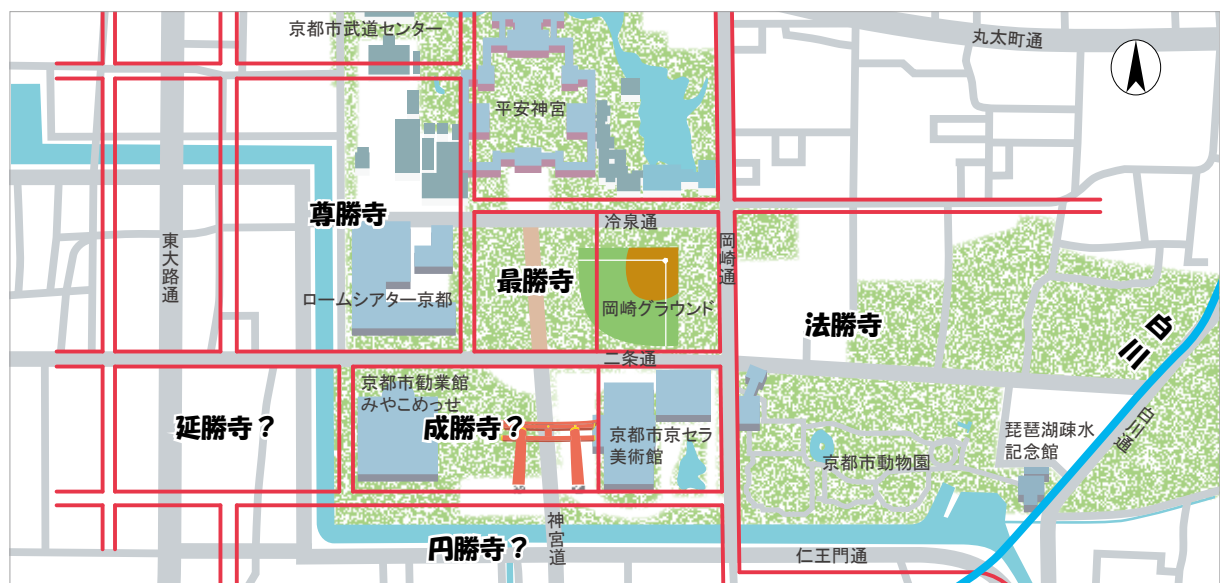


図1 岡崎と六勝寺の配置